



Title	乳幼児と母親の遊び場面における注意の共有
Author(s)	矢藤, 優子
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42225
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 矢 藤 優 子

博士の専攻分野の名称 博士（人間科学）

学位記番号 第 15918 号

学位授与年月日 平成13年3月23日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

人間科学研究科行動学専攻

学位論文名 乳幼児と母親の遊び場面における注意の共有

論文審査委員 (主査)
教授 南 徹弘(副査)
教授 外山みどり 教授 日野林俊彦 助教授 中道 正之

論文内容の要旨

【目的】

他者が注意を向けている対象に自分も注意を向けたり、自分が注意を向けている対象に他者の注意を向けさせたりすることによって、他者と同じ対象に注意を向けることを「注意の共有（joint attention）」という。他者とある対象についての注意を共有することは、その対象についての知識や感情を共有することを可能にするため、注意の共有は子どもの言語発達をはじめとする認知発達や情緒発達にも重要な役割を果たす。幼い子どもに対しては、大人の側がその発達段階に応じた適切なレベルの援助（足場作り：scaffolding）を行うことによって注意共有の成立を促すことが必要である。子どもと日常的に関わりあっている母親は、育児などのやり取りを通じて子どもの発達段階や気質特性（気が散りやすい、反応が激しいなど）を把握し、それによって足場作りのしかたを調整していると予想される。

本研究では、他者と注意を共有することが可能となる初期段階にある7カ月齢と、他者の注意を調整するための指さしや提示などのスキルを身につけはじめた12カ月齢に焦点を当て、おもちゃを介する母子相互作用場面を縦断的に観察し、次のような問題を明らかにすることを目的とした。

- ①母親はどのような方略（導入／追加／応答／転換）で、どのような注意喚起行動の手段（指さし／タッピング／提示／手渡し／例示／身体的方向づけ）を用いて子どもと注意を共有しているか。また母親の注意共有方略および注意喚起行動の手段に対して、子どもはどのような反応（注意を喚起されたおもちゃを操作する／見る／グランス／無反応）を行っているか。母子の注意共有は母親と子どものどちらが主導することによって成立しているか。
- ②子どもの言語学習の基盤となる注意共有場面で、母親はどのような発話を行っているか。その際、子どもの月齢の違い、や注意共有をどちらがリードしているかという主導パターの違い、によって母親の発話に違いはあるか。また子どもの発声や注意喚起行動に対して、母親はどのような言語的応答を行っているか。
- ③子どもの気質特性によって、母親は子どもと注意を共有するための「足場作り」のしかたを変えているか。

【方法】

大阪府に在住する母子23組（女兒11名、男児12名）の協力者を対象として、子どもが7カ月齢と12カ月齢の時に家庭訪問を行い、行動観察を行うとともに子どもの気質に関する質問紙調査を行った。観察に際しては、観察者1名（筆者）が家庭を訪問し、持参した複数のおもちゃを用いて母子による遊び場面（約20分間）のビデオ撮影を行った。

本論では、ビデオに録画した約20分間のおもちゃ遊び場面のうち10分間のデータを分析に用いた。

子どもとの相互作用の中で生じた母親の行動のうち、「注意喚起行動」と「子どもに向けられた発話（対象物、子ども、母親自身についての言及、対象物への関与を促す命令など）」を記録した。母親の「子どもに向けられた発話」は、発話のひとまとまりを1バウトとしてカウントし、観察時間中の総出現頻度を求めた。同時に、母親の発話が生じた時の注意共有パターン（子ども主導型／母親主導型／母子協同型）を記録した。さらに、子どもに向けられた母親の発話の中に「対象物の名称」が含まれていた回数と、子どもの発声および注意喚起行動に随伴する母親の応答も記録した。また、母親の注意喚起行動に対する子どもの反応（無反応／グランス／見る／操作）を記録し分析した。

子どもの気質を調査するため、第1回観察時に日本語版 Revised Infant Temperament Questionnaire、第2回観察時に日本語版 Toddler Temperament Scale の記入を母親に依頼した。

【結果及び考察】

1) 母親の注意喚起行動とそれに対する子どもの反応

注意共有パターンのうちでは、7カ月齢と12カ月齢のいずれにおいても子ども主導型の注意共有が最も多く、母親の注意共有方略の中では、子どもが注意を向けている対象に合わせて母親も注意を向けて働きかける「応答」方略が最も多く生起していた。母親の注意喚起行動の手段では、おもちゃを操作してみせる「例示」が最も多く見られた。母親は子どもの注意の向きを考慮した方略で注意共有を成立させ、具体的に構造化された手段を用いて働きかけていた。また、注意共有方略によって使用される注意喚起行動の手段は異なっており、「応答」方略の際には子どもの興味をより促進するような具体的な手段が多く用いられていた。

母親の注意喚起行動に対する子どもの高いレベルの反応（注意を喚起された対象を操作する、見る）は7カ月齢時よりも12カ月齢時に多く見られた。また母親の注意共有の方略や注意喚起行動の手段の違いによって子どもの反応のしかたは異なっており、注意の移行や抑制など子どもの認知的処理の負担が少ない方略（「応答」など）や構造化された具体的な手段（「身体的方向づけ」、「手渡し」など）に対して高いレベルの反応を示した。

2) 子どもに向けられた母親の発話

子どもに向けられた母親の発話量は、子どもが7カ月齢の時よりも12カ月齢の時のほうが多く、発話1バウトあたりの「対象物の名称」の生起も12カ月齢時のほうがより多く含まれていた。子どもが7カ月齢の時には、子ども主導型の注意共有時に子どもに対する発話量が多く、12カ月齢時には、母親主導型の注意共有時に発話量が多かった。子どもの月齢によって母親は子どもに与える言語的情報の量やタイミングを変え、子どもの発達段階に見合った働きかけを行っていたといえる。また子どもの発声や注意喚起行動に対して、多くの場合母親はそれらの行動を社会的に強化するような応答を行っていた。

いずれの月齢でも、母親は母子が注意を共有している対象物について言及することが最も多く、母子の注意共有が媒介となる対象についての知識を子どもに与える機会となっていたと考えられる。

母親の発話内容を詳細に調べると、7カ月齢時には対象物についての母親の感想や子どもの内的状態についての言及の生起が多かったが、子どもが12カ月齢の時には対象物の命名や使い方の教示、子どもの行動や内的状態に関する質問の生起が多かった。母親は、子どもが7カ月齢の時には情緒的な側面からの発話を多く行い、12カ月齢時には客観的情報を提供したり子どもの応答を引き出すような発話をより多く行っていたといえる。これは、2項関係による情緒的交流から物を媒介とする3項関係へという子どもの発達経路に沿った働きかけであると考えられる。

3) 母親の注意喚起行動と子どもの気質との関連性

母親の注意共有方略や注意喚起行動の手段には子どもの気質による違いが見られた。しかしそれらに対する子どもの反応のしかたは気質との関連がほとんどみられなかった。このことから、母親は子どもの気質の特徴に見合った形で子どもの注意の喚起のしかたを変化させ、それによって子どもからの一定レベルの反応を引き出し、注意共有を維持していたといえる。

【今後の展望】

母親は、子どもの発達段階や気質の特徴に応じたサポートを主体的に行うことによって子どもとの注意を共有し、子どもの認知発達や情緒的交流を促す「足場作り」を行っていた。母子相互作用を行動観察法を用いて分析するという本研究のようなアプローチは、先行研究にみられるような実験的研究によって得られた注意共有の機能的側面に関

する知見を社会的文脈の中で確認し、さまざまに応用していく可能性をもたらす。今後の注意共有研究は、視覚的モダリティや文化的文脈を超えて、さらに幅広いものとなることが望まれるだろう。

論文審査の結果の要旨

ある対象について他者との注意を共有するという「注意の共有 (joint attention)」は、子どもの認知発達や情緒的発達に多大の影響を与える現象として内外の発達心理学者の注目を浴びている。本研究は大阪府内の母子23組を対象として、乳幼児が7カ月齢と12カ月齢時に家庭訪問を行い、母子の遊び場面を録画し、そこから得られた行動観察データを詳細に分析したものである。

本研究の結果において、注意共有のパターンでは、7カ月と12カ月のいずれの月齢においても子ども主導型の注意共有が最も多く、母親の注意共有方略の中では、子どもが注意を向けている対象に合わせて母親も注意を向けて働きかける応答方略が最も多く生起していた。また母親の発話分析から、母親は子どもの月齢に応じて言語情報の量やタイミングを変え、子どもの発達段階に応じた働きかけを行っていたことも明らかにされた。さらに本研究では行動分析のみならず、7カ月齢時と12カ月齢時にそれぞれ子どもの気質調査をも実施し、母親が子どもの気質に応じたいわゆる「足場作り (scaffolding)」の仕方を変化させている可能性も示した。これらの研究の成果から、母子間の注意共有研究における行動分析の有効性と重要性が示された。

このように本研究は、乳幼児期の注意共有研究に行動分析の基礎資料を提出するとともに、母子相互作用の研究に新しい研究分野を切り拓いた研究として将来への発展を予想させるものでもあった。

以上の内容により、本審査委員会は本論文が母子関係と注意共有に関わる独自の着眼点を持った優秀な研究であることを評価し、博士（人間科学）の学位授与に十分であると判定した。